

第180回くらしの植物苑観察会 2014年3月22日(土)

「花々をめぐる日本と韓国 -サクラとムグンファ-」

高田 貫太(国立歴史民俗博物館 考古研究系准教授)

今回は、日本と韓国で花々を愛でる心情の共通するところと異なるところを、桜と槿を例にとって、考えてみたい。

もう少しすると、お花見のシーズンである。開花予報が出され、人々はお花見の日の天気に一喜一憂し、場所取りに精を出す。「花より団子」に象徴されるように、桜の花を愛でるとともに、仲良い人々とワイワイ過ごすことのできる行事である。

実は、韓国でもお花見は盛んである。日本と同じように開花予報がテレビやラジオで流され、各地で桜まつりが開かれる。大勢の人々が訪れ桜の花を觀賞する。

このように、現在の日韓の双方に桜を愛でる習慣があるが、桜から感じ取る想いは微妙に異なるし、お花見の習慣が形成されていく歴史的な経緯にも違いがある。今回はその点について考えてみたい。

また、日本では庭先などで一般的にみられる槿の花は、韓国の人々の思い入れが特に強い花である。韓国の国花に定められているし、韓国の国歌「愛国歌」でもうたわれている。漢字で「無窮花」と表記されるように、永遠に咲き誇る花とされ、厳しい歴史を歩んだ国の象徴とされることが多い。槿が、



咲き誇る槿の花



韓国でのお花見の様子

なぜ韓国の人々にとって特別な花となったのか。この点についても触れてみたい。

日韓の文化的な経済的な交流は深まる一方で、政治的な交流は冷え込んでいる。けれども、人々の美意識には共通したものがあることは確かである。花を愛でる心に、わざわざ国を持ち出すこともないことは事実である。

ただし、韓国の人々とお花見に行く機会があったとする。その場合に、花を見ることで抱く心情に共通するところと微妙に異なるところがあることを知っておけば、彼らとの交流はより深いものになるのではないかと考える。そのような意味合いを込めて、「花々をめぐる日本と韓国」を考えてみたい。

.....
次回予告 第181回くらしの植物苑観察会 2014年4月26日(土)

「趣味で桜草」 茂田井 宏(野田さくらそう会 世話人代表)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要